キズナエピソード

朝永 花織　6話

//ヴィジュアルノベル形式開始

//背景：黒

「そういう空気読めないとことか、マジ最悪……。

今まで相手してあげてたけど、

年下の子とか、ウチやっぱ無理」

「付きまとわれて迷惑だから、

もう近寄ってこないでくれる……？

じゃ。」

花織からそんな言葉を突きつけられ、

俺は心の底からムカついた。

//次ページ

相手をしてあげてた？

……嘘をつくなよ。

年下の子とか、興味ない？

……嘘をつくなよ。

付きまとわれて迷惑？

……嘘をつくなよ！

//次ページ

花織にそんなツラい嘘をつかせてしまった。

そんな俺自身に対して、本当に腹が立っていた。

俺はまだ、花織に何も伝えていない。

だから俺は……ずっと残っていた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//都立有羽・廊下・夜

［花織］

「とびおくん……!?」

［とびお］

日もどっぷりと暮れてしまい、

みんなが帰ってしまった頃に

ようやく待ち人は教室へと戻ってきた。

［とびお］

「よぉ、一緒に帰ろうぜ」

［とびお］

花織の目は赤かった。ずっと泣いていたのだろうか。

もしかしたらそれを隠すために

みんなが帰る時間まで出てこなかったのかもしれない。

［花織］

「とびおくん、なんで、まだいるの……」

［とびお］

「そりゃあ、お前を待ってたからに決まってるだろ。

俺はまだ、花織に何も伝えてないからな」

［花織］

「な、なに……？　ウチに伝えたいこと……？」

［とびお］

「あぁ。まずは……ごめん。

その気がなかったとは言え、花織のことを傷付けた」

［とびお］

「……でもさ。

1歳違うことなんて、たいした問題じゃないだろ」

［花織］

「――っ！

なに、とびおくん。

そんなことを言うために、わざわざ残ってたの!?」

［とびお］

どうも俺は、また花織の逆鱗に触れてしまったらしい。

いや、一回キレている分、キレやすくなっているのかも。

花織の目から、ぼろぼろと涙が溢れ始める。

［花織］

「1歳の差がたいした問題じゃないなんて、知ってるよ！

でも、ウチにとってのその1年間は、

とっても大きなことなの！」

［花織］

「ウチは両親とも教師で。

中学の時はずっと進学校を目指してた！

すごく……すごく期待されてた……」

［花織］

「だから、浪人するって決めた時も、

『もう1回チャンスがあれば絶対に受かる』って

思われてたし、自分でも思ってた。」

［花織］

「でもウチはだんだん、

プレッシャーに耐えられなくなって……。

拒食症にまでなって、病院で療養するしかなかったの！」

［花織］

「そんなウチに対しても、お父さんたちは優しかった。

でも、ウチにはそれが痛かった……苦しかった……。

結局、もう頑張る気力が出なくて受験先を変えた……」

［花織］

「1年……そのたった1年でウチは終わっちゃったの……。

期待に応えられない弱い自分を思い知らされて。

そんな自分のことが嫌いなのに、変わる事もできなくて」

［花織］

「だから自分の弱さからは目をそむけて。

他人に気に入ってもらおうとして、。

どうでもいいお願いも断らずに、笑ってやり過ごす……」

［花織］

「そんな、どうしようもなくダサい女になっちゃったの！

あの1年のせいで……！　あの1年の……！」

［とびお］

花織の言葉は俺に対して怒っているというよりは

自分に対して怒っているように思えた。

……だから俺は、花織に優しく微笑みかける。

［とびお］

「問題ない」

［花織］

「問題ない!?

どうして他人のとびおくんがそんなこと言える――」

［とびお］

「だから、お前が今までグダグダ言ってきたこと全部、

俺が花織を好きなことに対して何の問題にもならない」

［花織］

「……え？　今、なんて……？」

［とびお］

「どうしようもなく面倒見がよくて、

どんなときでも誰に対してもすげー優しくて、

そりゃ怒るときだって有るけど、それも超可愛くて……」

［とびお］

「勉強だって俺よりできるし、

俺のどうでもいい話にも楽しそうにノッてくれるし、

そばにいるだけで幸せな気分にしてくれるし……」

［とびお］

「全部！全部だ！

とにかくお前の全部含めて花織のことが好きなんだ」

［花織］

「え……。

あぅ……そんな……。

なにそれ……」

［とびお］

「どうした？　他にもまだ隠し事あるのか？　言ってみろ。

ま、たとえ花織が地球征服を企む宇宙人だったとしても、

やっぱり俺が花織を好きなことに問題はない」

=========================スチルカットシーン開始=========================

［とびお］

何も言えないでいる花織を抱き寄せる。

花織は俺を見つめたまま、かすかに笑った。

［花織］

「ずるいよ」

［とびお］

「ずるいのもダサいのも、全部ひっくるめて俺らだろ」

［とびお］

俺は花織の目にたまった涙を拭いとる。

そして花織の体を抱いたまま、深く、長くキスをした。

=========================スチルカットシーン終了=========================

//【R18版の場合、ここに挿入】

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

//白い部屋

そこで意識が覚醒した。

「……あんな可能性もあったのかもしれない」

俺はひとりごちて、白い空間を眺める。

大きなスクリーンに、花織との思い出を幻視する。

//次ページ

他人の面倒をいつも見ている花織。

どんなことにだって真面目に取り組む花織。

心に傷を抱えて、それでも気丈に振る舞う花織。

そして、腕の中で震えるただの女の子の花織。

……そのどれもが、愛しかった。

//次ページ

自然と胸の奥から気持ちが沸き起こってくる。

花織を守りたい。

俺は心にそう誓った。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//6話END